



例会報告
佐賀平野と有明海の成り立ち
佐賀市 (2023.5.28)

3月に放送されたNHKブラタモリ「佐賀～佐賀の発展は“水”にあり？」では、佐賀市内のお堀や有明海の干潟などをタモリさんがブラブラ歩いて、幕末佐賀が発展してきた謎を探りました。なんと、今回の例会の講師は、そのブラタモリでタモリさんへの案内役として登場した理学博士の下山正一先生。放送後、少年団より下山先生にブラタモリで紹介された佐賀平野や有明海の成り立ちについて、少年団バージョンで説明していただけないか依頼し、快諾いただいたのでした。団員さんの中にはブラタモリファンも多く、今回の例会のために、放映された番組を何回も視聴して予習（復習？）してこられた方もおられました。会場はブラタモリの舞台と同じ東よか干潟ビジターセンター「ひがさす」です。

まずは実際に有明海の姿を見るために、堤防下の遊歩道を歩いていきました。有明海の干潟を形成する泥は火山灰が主成分。満潮時には沿岸に、干潮時には沖合まで運ばれて、堆積していきます。また、有明海の最大干満差は約6mで日本一。その理由は、有明海が巨大な内海の地形をしており、有明海の固有周期と、東シナ海の干満周期とが合って(共振して)干満差が2倍に増幅されるためだそうです。この干満差によって、有明海の河口付近では現在でも干潟が広がり続けているそうです。遊歩道を進んでいくと、干潟の上にボロボロになったコンクリートが半円状に広がっているところがあり、そこは昭和40年代まで港であった跡だそうです。現在は、港の堤防が堆積によって埋まってしまい、頭の部分だけを干潟の上に見せていたのですね。

では、土砂はどのようにして堆積していくのでしょうか。ひがさすに戻り、下山先生が準備されていた土をペットボトルに水と一緒に入れてしっかり振って実験をしてみました。振ったペットボトルをそのままにしておくと、徐々に泥水が透明になっていきました。底にたまった泥の様子を見てみると、粒の大きいものが一番底に、粒の小さいものが上にたまって層を作っている様子を観察することができました。

「ひがさす」の研修室に戻り、佐賀平野と有明海の成り立ちについての講演会です。子供たちにも分かりやすいような丁寧な説明で、佐賀平野ができる様子がよく分かりました。また、ブラタモリのロケでは、ここひがさすで50分ぐらいの収録時間だったが、実際に放映されたのは5分だったこと。下山先生は三重津海軍所跡の地層の調査も行っていて、船の高さと当時の海面までの高さが一致することから、ドライドックであったことの証拠となることなど、興味深い話もたくさんしていただき、大人の方も大変勉強になったと感想を寄せていただきました。今回の例会のために朝早くからお越しいたいただき、説明いただいた下山先生に感謝申し上げます。ありがとうございました。（参加者17名）

講演の「まとめ」より

- ・有明海は約1.2万年前に出現、約7千年前に最大海域となった。
- ・大きな干満差で発生した浮泥が河川を遡上堆積して低平地を形成。
- ・低平地の拡大、海岸線の南下、川の流路変更で江ができた。
- ・低平地の土地利用は湿地の開拓からはじまった。
- ・江戸時代以降、干拓が自然陸化を上回り低平地がさらに拡大。
- ・島原大変津波(1792年)が有明海の砂干潟を拡大した。
- ・幕末佐賀藩海軍所のドライドックの運用は潮位差を利用した。
- ・有明海でのアサリ漁場は1792年島原大変以後に出現。
- ・人類活動が有明海を徐々に変えている。

